墨法

特別
14
3157
8

須磨乃煙

14
3157
8

小娘ゟ梅に来ぬ世で田舎播　桐栖

汲之乃ゆふへおいはぐる　士朗

釣らつ穀いつ晩に菊めくん　一草

山茶花の香ひ移る枝哉　長翁

嬉しくも雪に月洗ひ居まて　古陵

酒のよほそく馬の婦り髪　阜悦

飛田文庫

[illegible]の折くらべる山の歌　土肥
竹をすくしてなびかぬものとなれる　松足
[illegible]なびかぬ風ゆふと吹　呉茱
小海老色の[illegible]の宝　雷梅
[illegible]月を茶[illegible]の東て　八風
[illegible]乃雪をもてる[illegible]　蘭
[illegible]のしぼりを[illegible]　其雄
[illegible]のようなる[illegible]吹　士朝
[illegible]　桐栖

解けぬる縄の[illegible]　袁石
人も[illegible]のもの　古陵
いとなの[illegible]　長為
西田の[illegible]　松人

一度探題

傘[illegible]猫乃恋　松足

又してもくるまれ柳ぞ　和田松
春雲やあつの仏の地蔵尼　寿池
苔やあ雲ちもるる松のうへ　松人
仏の御ちよなる春の夏　髭雨
春の月ぞ花ちる松　世雄
又ひとつれやゆるる山の中　一草
岸ちの月ちもなれし蛙哉　高後
柳より桜ちゆるて春の雨　呈業

きさらぎ桜ぞ春の雨　五越
志人ちる山ちる川ぞ　桐栖
まのあたり春の雨ちゆ　丑風
猫ぞ命ぞ春ぞ　六朗

帰引の郷
春風のかをる風ぞ猫の水　寿池

松うく瀧に打て露乃ち　長志
白瀧のおとかすむ夕霧　松足

生田乃春

遠篝ふる雨ふる乃花の
きさらぎやもりし梅の花　春地

みなと川

鳴峠と時ゆ多い鶯よ　春川　春地

鳴峠の二字より梅ゆ
ゆ限もつくる雅
なれいやのさくさて
いつ春くしあく更

秋風やぱ式きき紀の源川　士朝

蕈御所

すゝ乃ぶ芹もゝ乃花の風　松足

雪ふる雲乃かゝるゆふへ　士朝

むし〳〵の鳴ふかき藪の奥　松人

菊そのの花ふむ人もなくて　閑雲

籠乃内ちらで皆人よやる　阜池

雲消て更〳〵かゝる新の月　長高

寒ふるなかき夜も残りう　松之

猶もなを紫山ふ行山路　松人

ほう〳〵鳴て名ゐる笛　麦の

あるゝなき松の下て立寄ん　阜池

莫屋乃嶋ふ鳴ふたゝれなくう　士朝

敷桂の一日のうゝ義のそら　桐栖

福京の四景

祁綱の今はうれてもの淋　士朗

大和田

松影や帆船ふかせもの月　素竹

須磨

聯〳〵月も新しす万葉　松足

浪ちかや菊原ふきゆる春月　桐栖

春風のいかなる波の松　長茶

源氏蔵雑子見ぬ春の月　春色

一日いつ見ぬ波の春　松足

菜の花やうつる波の末　桐栖

苗代の波ふるゆめ　士朗

月前梅

かゝしたる郭やゝ數本の梅の花　士朗
月いつこまきさゝ枝の宣　相栖
義堂も見れば老枝して　長高
そのゝ宿もて世ゝ山　烟朗
塩さの又れしうの義　栖
おそしもゝの吉　地一氏　高

ふ京ふのふ伊笑子日学ゝり　朗
いく度ゝ変ゝる秋のゝ　栖
いゝもゝの數の今も海ゝ賀て　高
東明るもいよ松風う吹　朗
人ゝいたもれ松ゝる秋の月　栖
雲乃関屋の玄廣さゝ高　高
月もく出ゝ海ゝ月のふ眺ゝ　朗
うつゝ色てゝものいゝれ　栖

其の澄しまうくりう　為
雲もし掛ふ嶋の湖つゝ　朝
おちつゝあれの日和もしるべて　栖
こゝゝ泳せの浪をいくく　為
公三千馬雅しして立かるる　朝
山のあるいの星れを穿ふ　栖
和耳よ〳〵の根ゝ身あふさ　為
計のやゝる蓮ゝ根ふも　朝

遠〳〵よ来て小雪掛橋の上　栖
月よ〳〵と行よれ松　為
打角と〳〵のまい仰る廉の夕　朝
油彩ら〳〵ゝゝ陣の野　栖
海原のかよ〳〵ふる白を吹て　為
行〳〵きえゆ〳〵海那の新　朝
今小兵衛の田長〳〵ゝ　栖
ちよい〳〵ゝ立て咲く川　水　為

遠浦なる弱い雲乃有るを　朗
望れば波のたくひなきを　栖
うらうらと大空二つ晴れて　為
さしてれば月の光つ　朗
見捨ぬ物は朝顔の　栖
たゝみ捨てる波ぞいとう　為

兵庫の浦より舟あらして
夕日の雲をうるをもちうて
たとゝゆゝ波のさゝを
おほつかなきもちうの屋を
深やうるゝ皆の所

なのをてゝ入ゝすて波ノの秋　士朗
波ノ音ハ戸をたてゝまうる秋の風　丶
山ふかひ西波ノとふ所なつ

ひち笠の月路出られと
あやし紅葉はけるる
海士の家に神もたて寄月の雨　士朝
宿かりんといて蘆とふ人
ゆくらかなる
八重すすきやそこもとれ野の雪　方明
かたらさまるものもいとれ野月紫　松足
月さし海の月きもとれ

まうてはなるれば
海士の家を呼てあるく月夜うら路　士朝
月のかりよそへられ眉子
雲をうる人の出きてうふ
岩屋いくはとあなる
野よりとせ弱ひて紫
ゆきせ弱てて砂の上平
延うち変けるうとの

燒ぬてくいすふき英あり
英とあるかゝ英てゝうりの親
羽子写情意孫ひ金沙祭
立ちて居てみかゝし
なとゝ立つれ八月の真ゝ子
ゝ又あれあり
ゝ出る日より宣
りて一日として月夜

よりふれ八なりゝり
ゝ雪ゝいふひよなりて
毒殺ひらけける月新の
かゝてうつゝゝ見
ゝてゝゝけ紀
よてゝ新

ゝも月よ淡路島　松兄
月ゝゝ八ゝ徳ゝ淡路島　士朗

秋もやうやく更ぬ人とのかよふ道も絶まる頃

帰りぬ神ぞとゞめてうちまもるむ松足ゆる雪波小

殆りてよりし夢二ゝ覚れ

和を立ちとゞて月八見面

なかしうるさて立出つ

浜簾けつる月の光残れ　士朗

文のうへまるなれいとて

福岡を訪ふ山の雲はよ

いそのいゝくゆ雪波乃

夢二伊勢れ吉川宮ゆて

近来て云へきあるら

さんそ東へ出乃如う

舟よ打乗て

星れ竹の長野浦より海人の月　夢二

月影や垣も高くも波の藻　春川

かくいひし遅風ふきぬ

たれ家もものとぶる

除夕の月ふるはいとるる也

松ふかみあて遅桜れる

こそ深みあらはれとて

よろづしあつり地蔵ふる

なみはやうまをてわり移へい

又舟をうりて高砂ふる

月影もし人を折ふと時かを見　春川

その夜舟をうへして

舟を乗てとれいとあり　英二

又芝居はみ屋をかへ

て相栖二京の人と交る

[illegible]の士朝子源[illegible]乃
月見の形[illegible]
家より書[illegible]
[illegible]

文化甲子春　兵庫桐栖編

須广卷終

明石乃書

ぬるしの石は物ぬしを

ゆるぬ風の秋さらの秋さらは　士朗

神ぬしをまつるまちの山りみ　鴨國

うつり行の山ぬしをつれて　野泉

扇の三ぬもまつすこの路　杉史

捷の本まつゆて立つ門の口　桐栖

人の見すれば籠とりまぬる　春有

庶のうれひ毒牙のみなとに　旭南
月よりうらるる鬼灯　草池
きつ忘れ新のあらたまし　書の
梁簾屋の書の風呂楼の行　桃下
いかなれば忘るるあるまじき　赤貝
松のしづくとうるうとしるる　紫の
あるうさを忘れぬ人の筆て　出
字治の法師の蹇をなくく　朝

帝すする蜜の蜂やあるもむ　兄
なりてもきはきき堂　泉
蛍もも月をのゝ時なれや　有
二つ指ひしゝ懸の佩とる　栖
上の屋のつもむもたれ　池
屑のゝゆるる屋よて　南
大うの月夜も月ハなの弓　下
清章れあとうの　河

きりの底新の九条に詠ませ給ふ　系
とゝりゝと樹々木つむもり　良
般若寺の桜　業平
泉
主殿の宮ゝ雲居雁等　源
夕顔のむやゝ　浮舟乃手　胡
陀ら陀ら　三人東の京　兵
かるも浮世の星　小野　栖
かなゝきは時ゝ打ちを見まむる　有

春ゝ山ゝ　八雲御琴　南
風の吹ゝ　ゝ　初　為
ゝの夢ゝ　ゝ　舊の亭ゝ　竹
日和定　る　乃ゝ　下
月もゝ　ゝの神の示　良
為ゝ　ゝる　の　州　池

[illegible]の世まあらハ[illegible]　桂下
[illegible]　[illegible]の山　素首
[illegible]梅の花　備國
[illegible]の[illegible]　池泉
[illegible]　加賀
[illegible]の滝　東奥
[illegible]山[illegible]　丈寛

[illegible]の[illegible]月[illegible]　桂下
[illegible]　丈齡
[illegible]　[illegible]
[illegible]月の[illegible]　長崎
[illegible]の[illegible]　関東
[illegible]山[illegible]　麦阿
[illegible]梅の[illegible]　庄泉

おつけまうふ毛塩ちりもの面　桃下
き度やすいつてもあるものの　恒世
大坂もたていかたつ帰る屑　東貞
秋夜や沖のうしまとも　旭南
無尼のよさ有れば彼岸　北泉
来るもの人むつまじ花の蔭　春前
こゝのまる人もつまさまうう　武屑
よるとみしほ秋ふまて　其雄

業務繁て殺たるさ岩ふう　桃下
海苔塩ふ芋食乃樽ふりう　之貞
念佛して涼ふ中も毎月　旭南
秋来や月のあかい西ふう　相栖
蛸つちやたほとしてもの月　杜之
ないつもれ出るもと帰る屑　身地

行の一本をしてもまれ月東岸　槽國
さらるもしとまつ蛙哉　士朗
興塩る舟を雲よ押もして　杉足
海水を皆る玉ゆる生水本　野泉
吹あすの風やいかたうん　長弁
いくつも牛の連る朝霜　桂下

塩たる弟も屬れ遣かし　阜地
拙案使の下向待ちうて　玉屑
かまさの次郎の中を門出　相栖
杉垣てつくる蜂乃巣と　麦竹
思ふ皆新風吹かれ　亦負
恵能よりし笑いてみる　素肩
塩ふもとの田植をせう　共雄

四たまちよ雅俗うつし
いそく毎しと俳諧もよ
姿なりしひとりてやみぬ

文化元年壬戌　明石潟國編

赤石卷終

蕉門俳諧書林　京三条通寺町西江入ル　菊舍太兵衛